

文部科学省委託事業 「平成22年度青少年体験活動総合プラン」
子ども・若者育成支援のための体験活動推進事業
ふれあいワークキャンプ

心温まるみかん生産者とのかかわりや、みかん摘み体験等の職場体験を通して、ひたむきに仕事と向き合い、仲間とともに働きながら共同生活を送ったことで、今まで味わったことのない連帯感や達成感を味わうことができました。

1. 事業実施までの経緯

近年、ニートやひきこもり、不登校といった青少年をめぐるさまざまな課題が社会問題化しており、その原因として直接体験の不足、生活習慣の乱れ、希薄な対人関係などが考えらる。そこで、この問題に対応する国の政策として自然体験の指導者を養成する取り組みや、青少年の様々な課題に対応した体験活動を推進していくという「青少年体験活動総合プラン」が平成20年、文部科学省より打ち出された。青少年体験活動総合プランには、自然体験指導者養成事業と子ども・若者育成支援のための体験活動推進事業の二つがあり、今回のワークキャンプは後者の事業になる。発達段階に応じた様々な体験活動を実施しながら、ニート、ひきこもり、不登校などを対象に立ち直りを支援したり、社会性や就労意欲の向上を図ったりするというねらいがある。

本事業の委託を受けた国立青少年教育振興機構では、青少年の課題に対応した体験活動推進事業を全国28カ所の施設で継続して展開してきた。国立大洲青少年交流の家では、14年目を迎えた適応指導教室「おおずふれあいスクール」を併設しており、そこで長年に渡り積み重ねてきた自然体験や生活体験、就労体験等を積ませることで自主性や社会性がはぐくまれ、心身共に健康な生活を送るためのきっかけづくりができるのではないかとこの仮説のもと、県内の適応指導教室に参加を呼びかけて「ふれあいワークキャンプ」を企画した。

本事業は、国立青少年教育振興機構が昨年1月から取り組んでいる、課題を抱える子どもを対象としたプログラム開発事業「機構活性化プラン」にも該当しており、対象プログラムをより明確にし、関係機関と共同で開発・推進しながら、実践事例を体験活動フォーラム等で発信・普及するという役割も担っている。

2. ねらい

佐田岬半島の大自然の中に身をおき、柑橘の摘みとり作業等を体験することで自分なりの職業観を養う。

参加者や農家、地域の方々との交流や共同生活を通してたくましい生き方や心豊かな生き方を感じ、自立への力を育てる。

3. 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

4. 共催 大洲市教育委員会

5. 後援 愛媛県教育委員会

6. 期日 平成22年12月15日(水)～17日(金) 【2泊3日】

7. 場 所 国立大洲青少年交流の家 永沼農園 瀬戸アグリトピア 他

8. 参加人数 19名 (中学生8名、ボランティア青年2名、指導スタッフ等9名)
※中学生の内訳 (おおずふれあいスクール4名、他の適応指導教室4名)

9. 講 師 永沼農園 代表 永沼 寛氏 他

10. 日 程

時 間	15日 (水)	16日 (木)	17日 (金)
6:00			起床・つどい・朝食
8:30		起床・つどい・朝食	
8:40	受付 (自然環境館2F)		ボランティア体験
9:20	はじまりのつどい	移 動	宿泊施設の清掃作業 等
10:00	移 動	職 場 体 験	移 動
10:30	選果場の見学	*撰果作業 等	せと風の丘パーク見学
12:00	昼 食		しらすパーク見学・昼食
12:40	はじめのあいさつ	昼 食	移 動
13:30	職 場 体 験	職 場 体 験	青果市場見学
14:00	*柑橘の摘みとり作業 等	*柑橘の摘みとり作業 等	おわりのつどい
15:00	移 動	移 動	解 散
17:00	つどい・夕食	つどい・夕食	
20:00	夜のつどい (みかめクラフト)	夜のつどい (ふれあい座談会)	
21:00	入浴・就寝	入浴・就寝	

* 1日目の昼食は持参弁当、2日目の昼食は購入弁当、3日目の昼食は食堂、朝食・夕食は自炊

11. 活動内容

◆ 12月15日 (水)

「はじまりのつどい」【大洲青少年交流の家シアタールーム】

まずはじめに自然環境館のシアタールームで「はじまりのつどい」を実施した。京都造形芸術大学の寺脇研教授 (機構活性化プラン研究会) や交流の家所長のあいさつ、スタッフ自己紹介の後、緊張をした心と体をほぐすグループワークゲームの時間を設定した。ジャンケンしながら名前やキャンプネームを確認したり、好きな食べ物を記憶していくゲームをしたりした。参加者は自然な雰囲気でき自己紹介ができ、笑い声も出はじめ表情が柔らかくなった。この活動により緊張がほぐれ、さほど違和感なくワークキャンプがスタートできた。



「共同選果場の見学」【保内共選：八幡浜市保内町須川】

マイクロバスで職場体験場所に移動する途中、保内共選を見学した。最盛期には近隣のみかん農家から1日160トンものみかんが運び込まれるこの選果場では、最新の光センサー

を導入し、糖度・大きさごとにみかんが選別された後、箱詰めされていく様子を見学することができた。見学の後、事務所長より品種や等級、美味しいみかんの見分け方について学んだり、特秀品のブランドみかん「蜜る」を試食したりした。



「職場体験（みかん摘み）」【永沼農園：大洲市長浜町出海】

永沼農園がある出海地区の公民館で弁当を食べ、本日の講師であるみかん農家と対面式をした後、永沼農園へ出発した。まず、摘み方の手本を見学し、ハサミで実を傷つけないことや摘んだ実同士が傷をつけ合わないよう、へたの部分を二度摘みすることを教わった。3つのグループと作業場所を決め、見よう見まねでみかん摘みに挑戦した。集中力が散漫で作業効率はよくなかったが、みかん摘みを通して少しずつ表情も柔らかくなり、連帯感や仲間意識が徐々に生まれてきた。この日、約2時間の作業で、キャリー18杯のみかんを摘みとり、協力して農園から運び出した。スタッフサイドからは「もう少しがんばれたのでは…」という思いもあったが、参加者は十分満足そうだった。



「夕べのつどい・夕食作り」【瀬戸アグリトピア：西宇和郡伊方町大久】

1日目の職場体験が終わるとマイクロバスで約40分移動し、集団宿泊体験場所である瀬戸アグリトピアへ入所した。簡単な入所式をした後、夕方17時から交流室で夕べのつどいを行った。交流の家スタッフが進行し、健康観察、1日をふり返り代表者3名による感想発表、レクリエーション、日程説明を行った。レクリエーションでは、夕食作りに向けてグループの連帯感が高まるよう、ヘリウムフラフープに挑戦した。リーダーのかけ声に動きを合わせるなど、仲間意識が表に現れ始めた。



夕べのつどいの後、2班に分かれて初めての夕食作りに取り組んだ。メニューは手軽に作る事ができて役割分担もしやすいカレーとサラダにした。初めは道具が分からなかったり、誰が何をするのかお互い遠慮し合う姿が見られたが、時間がたつにつれ自然と役割が決まり、1時間ほどで美味しそうなカレーとサラダが出来上がった。外でしっかりと体を動かしているのでも進んでいた。

「夜のつどい」 ～みかんクラフト～

夜のつどいは交流の家に飾るみかんツリーのオーナメント作りを行った。交流の家スタッフがカッターを使って切り取りラインを入れる方法を実演した後、それぞれが思い思いのイメージでオーナメントを作っていた。みかんに書く絵やメッセージも様々で、受験に対する願いを書いている参加者



もいた。くりぬいて接着したみかんにシリカゲル（乾燥剤）を詰め込んで本日の作業は終了した。

30分ほど自由時間を設定し、その間に別室でスタッフミーティングを行った後、各宿泊部屋に分かれて順番に入浴・就寝準備をして床に就いた。

◆ 12月16日（木）

「朝のつどい・朝食作り」

ワークキャンプの生活は、早寝・早起き・朝ご飯が基本となる。6時起床で6時半から朝食の準備を味噌汁班とおかず班に分かれて進めた。朝食準備に時間がかかることを想定し、朝食の段取りが整ってから朝のつどいを実施することにした。朝のつどいは交流の家スタッフが進行し、健康観察、代表者3人による目当ての発表、ラジオ体操、日程説明を行った。



朝のつどいの後、ゆっくり時間をかけて朝食をとり2日目の作業の力を蓄えた。この日は、終日、みかん摘み作業が予定されていたが、吹雪で午前中を室内作業に変更したので、食事の時間をゆっくりとることができた。

「職場体験（選果作業）」【出海公民館大ホール：大洲市長浜町出海】



2日目は明け方から吹雪に見舞われ、みかん農家との合わせの結果、職場体験の内容を室内での選果作業に変更した。3チームに分かれ2Sから3Lまでの6段階に選果を進めていったが、とても手際よく集中して作業に取り組むことができた。選果作業の後、大きさごとにみかんの糖度を測ったり、みかんジュースと味を比べたりした。また、「昔のみかん農家がどれだけみかんを大切に、丹誠込めて育てていたか」という話も聞き、みかんの仕事に対する真剣味や、午後からのみかん摘みに対する意欲がさらに高まった。

「職場体験（みかん摘み）」【永沼農園：大洲市長浜町出海】

公民館で弁当を食べ、朝のつどいで立てた「協力してやる」「真剣に仕事に向き合う」という目標を再確認して、みかん摘みの作業に入った。一体感を出すため、作業場所や班分けはせず、「とにかくみんなで協力して、この畑のみかんを全部摘み取ろう」という指示を出して作業に臨んだ。前日のみかん摘みの経験や、1日半の共同生活から生まれたチームワーク、仕事に向き合う姿勢の変化によって収穫量は大幅にアップし、約2時間でキャリー43杯という驚きの収穫を上げた。この日は、隣の畑で摘み取りに苦労されていたお年寄りを手伝ったことで大変喜ばれ、「人の役にたつ喜び」も感じる事ができた。仕事をやり遂げた参加者の表情は輝いて、充実感や達成感で満ちあふれていた。



「夕べのつどい・夕食作り」【瀬戸アグリトピア：西宇和郡伊方町大久】



2日目も1日目と同様の流れで夕べのつどいを行った。この時点では、1泊2日の共同生活で堅さはすっかりとれ、逆にグループが固定化したり、自己主張をし始めたりする者が見られた。そこでレクリエーションでは、楽しみながら全体に目を向けて活動する内容を設定し、「あと1日みんなに目を向けて協力して乗り切ろう」と確認した。

夕食のメニューは、役割分担を考え鍋ものを設定した。食事作りも3回目となると段取りや調理も手慣れたもので、準備の時間もだいぶ短縮された。

「夜のつどい」～ふれあい座談会～

2日目の夜のつどいは、ワークキャンプでも大きな意味をもつ「ふれあい座談会」を設定した。人前で話をするのが苦手な者が多いことを想定し、2種類のカードを使って話を引き出す手法を試みた。クマのポーズや表情からさまざまな感情や様子を読み取ることができるベアーズカードと、自分自身の良さや強さを明確な言葉で示したストレングスカードを各48枚使用した。



ベアーズカードでは、ここに参加する前の自分と2日間の活動を終えた今の自分の気持ちにぴったり合うカードを選ばせ、選んだ理由を添えて紹介させた。参加前では「南予に来ることや泊まりの行事は初めてで不安」「知らない人たちと仲良くできるだろうか」「とても楽しみでわくわくしている」などの感想が、2日目を終えてでは「みんなとの生活にも慣れほっとしてる」「明日は何をするのか？次は何か？と考えている」「ちょっとホームシックになっている」などざっくばらんな意見や感想が出た。



ストレングスカードでは、このキャンプをきっかけに「自分はこうなりたい」「こう変わりたい」というカードを選んで紹介させた。「誰に対しても自分の意見が言えるようになりたい」「他の人にはない才能をもちたい」「前向きになりたい」「健康になりたい」など、今置かれている自分の現状をきちんと理解しており、そこから抜け出したいという思いがひしひしと伝わってくる意見や感想が多かった。仲間同士

の心の内を知り、さらにお互いの距離間を縮めることができた。

2日目の夜も自由時間を設定し、その間に別室でスタッフミーティングを行った。みかん摘みへの取り組み方や食事作り等のチームワークが格段によくなったことや少し疲れがはじめていることなど、参加者の情報を詳しく交換することができた。その後、各宿泊部屋に分かれて順番に入浴・就寝準備をして床に就いた。

◆ 12月17日（金）

「朝のつどい・朝食作り」

3日目も2日目の朝と同様の流れで朝のつどいと朝食作りを行った。最後の食事作りで食材を使い切るため、味噌汁やオムレツやサラダなど、充実した朝食メニューとなった。3日目は職場体験がないため、2日間の活動を振り返りながらゆっくりと朝食をとり、調理室の後片付けをすることができた。夕食・朝食をしっかり作りき



ちんと食べたことで、時間と手間はかかったが、食事の場がお互いの自然なコミュニケーションの場として、また、体調を維持する生活の基盤として大変有効だった。

「奉仕作業（宿泊施設の大掃除）」



最終日は、2日間食事やつどいで使わせていただいた瀬戸アグリトピア交流センターの大掃除を最後のワークに位置づけ、感謝の気持ちを込めて約1時間の奉仕作業に取り組んだ。ガラスふき、床のモップがけ、掃き掃除に分かれて作業を行ったが、誰一人手を抜くことなく黙々と作業に取り組んだ。

これまでの共同生活やみかん摘みの職業体験を通して、体を動かして働くことや協力して作業することに抵抗が少なくなり、自立への確実な一歩を踏み出していると確信できた。

「風の丘パーク・しらすパークの見学」【西宇和郡伊方町川之浜】

瀬戸アグリトピアで退所式を行った後、参加者相互の親睦や交流をさらに深めるために、佐田岬の観光名所である風の丘パークと昼食を兼ねてしらすパークの見学を行った。風の丘パークは、標高330mの尾根に位置する自然公園で、展望台や散策道が整備されている。段々畑が広がる山の尾根には高さ約50mの風車が立ち並び、宇和海と伊予灘を一望できる。初めて見る壮大な光景に感動する参加者も多かった。しらすパークでは、宇和海で獲れた新鮮なしらすを商品として加工されるまでの流れを見学し、そのしらすを使った郷土料理を味わった。



「青果市場見学」【八幡浜青果市場：八幡浜市産業通り】

職業体験の締めくくりとして、帰り道にある青果市場の見学をした。共同選果場とは違い農家が直接みかんを持ち込み、競りが行われる場所で大変活気づいていた。

3日間を通してみかん生産者との心温まる充実したかかわりがあり、生産から出荷まで一連の流れをきちんと押さえた体験学習を実施することができた。



「おわりのつどい」【大洲青少年交流の家シアタールーム】



ワークキャンプの活動プログラムをふりかえる「おわりのつどい」では、全員が自分の言葉でしっかりと3日間の感想を発表できた。「知らない人と話すのは苦手だったが、この体験で少しは改善できた」「この3日間で協力することの大切さ、分からないことは聞いていくことの大切さを学んだ」など、その感想からは、それぞれがキャンプ後の生活につながる、自分なりの学びを持ち帰ることができたことと確信できた。ホームグラウンドである「おおずふれあいスクール」の参加

者やスタッフ一同が、握手で他教室の参加者を送り出した。
「いっしょにやりきった」という充実感と心地よい疲労感、
「もう少し一緒に活動したいな」という余韻を残し、この事業は幕を閉じた。



12. 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

※ 満足：50.0% ※ やや満足：50.0% ※ やや不満：0.0% ※ 不満：0.0%

- ただただ楽しかった。また機会があれば参加したいと思った。
- 2日間とても楽しいことがあって、これで終わるのかと思うとちょっとさみしい。
- この2泊3日間は一生の思い出に残る体験になった。
- 3日間いろいろなことがありました。気の合う人、合わない人がいた。でもそれをいちいち気にしていたらかなり疲れると思う。いろいろな人がいるのだから、その人の好きなどころを見つけられるよう、これから努力したい。
- 掃除は苦手だったけどきちんとやれた。寒くていろいろ大変なことが多かったが楽しかった。
- 最初はあまり話すことができななかったけど、最後は他のスクールの人々と話すことができた。
- 他のスクールとみかん摘みや料理作りをしながら話ができ楽しかった。
- 最初は緊張して話せなかったけど、2日目、3日目は、みんなといろいろな話ができる。この「ふれあいワークキャンプ」に参加してよかった。
- 2泊3日お世話になった感謝の気持ちで、一生懸命、掃除と部屋の片付けをがんばった。
- あまり他のスクール生と話すことができなかった。この体験をいかして積極的に話しかけたい。

13. 成果と課題

(1) 参加者に及ぼす効果の検証方法・結果

ア I K R調査の考察

I K R評定用紙（簡易版）を用いて、「いやなことははっきり言える」「人のために何かしてあげることが好きだ」といった28項目の質問に対し、「とてもよくあてはまる」を6点、「まったくあてはまらない」を1点として得点化し、項目の平均値や合計値を事前と事後で比較する調査を実施した。質問内容は、心理的社会的能力に関するもの14項目、徳育的能力に関するもの8項目、身体的能力に関するもの6項目に分かれ、その合計値の得点が生きる力の数値として表される。

I K R調査の結果、生きる力の合計値において、事前99.5から事後103.3～3.8ポイントの向上が見られた。内訳は、心理的社会的能力について1ポイント、徳育的能力について0.8ポイント、身体的能力に関しては2ポイントの向上が見られた。

さらにその内訳を見ると、心理的社会的能力の中の「適応行動」…「その場にふさわしい行動ができる」0.7ポイント、「徳育的能力」の中の「まじめ勤勉」…「いやがらずによく働く」0.7ポイント、「身体的能力」の中の「日常的行動力」…「早寝早起きである」1ポイントの向上が見られた。

生きる力を数値化してみたことで、不登校に陥っている子どもたちの数値がもともとかなり低いことが分った。向上した数値はわずかであるが、このような活動に参加することで少しずつ生きる力が蓄えられていくことを実感できた。

イ ふりかえりシートの考察

はじめのつどい、1日目・2日目の夜、おわりのつどいで「ふりかえりシート」を記

入した。「はじまり」の記述には、不安と期待の両方を示す内容が目立った。初めて会う仲間との宿泊体験だけに、「仲良くなれるだろうか」「話ができるだろうか」という不安な気持ちが先行していること、「しっかりと働いてみたい」「自分の役割を果たしたい」「仲良くなりたい」「協力して頑張りたい」など、自分なりの決意をもって参加していることがよく分かった。

1日目の夜の記述では、初日のみかん摘みや夕食作り、みかんクラフトについてのコメントが多く見られた。参加スクール同士の壁がまだあり「あまり話せなかった」「少しでも仲良くなりたい」という本音コメントも見られた。2日目の夜の記述では、選果作業やみかん摘みが充実したという内容が多く見られた。「話したことの無い人と楽しく話せた」「一緒に作業をして緊張したけど楽しかった」という、一つ壁を乗り越えた思いが伝わるコメントも見られた。

最後のコメントでは、「いろいろあったけど、3日間本当に楽しかった」「最後は、感謝の気持ちで一生懸命掃除を頑張った」というような、充実感や達成感が伝わってくるもの、「これをきっかけに、積極的に話せるようになりたい」「その人の好きなどころを見付けられるようになりたい」など、このキャンプをきっかけに自分を変えていきたいという意欲が感じられる前向きなコメントもいくつか見られた。

ウ 参加者の行動や変容の観察より

ワークキャンプ中の行動や事後の変容の観察より、おおずふれあいスクールからは、「他教室との交流がスムーズにできたことは、復帰への大きな自信となった」「他教室の友達への心遣いが随所に見られ、成長を感じた」「話し合いの場が多く設定されていて、同年代の意見を聞き自分をふり返るよい機会となった」「他教室と交流したことで言葉遣いやマナーが十分に身につけていないことや、言語表現力の未熟さといった課題を確認することができた」という意見や感想があった。

また、他の適応指導教室からは、「いつもと違う環境へ出向くことでチャレンジ精神と開放感が得られた」「このキャンプへの挑戦が自己の可能性を見つけるきっかけづくりとなった」「自信を取り戻し終業式や始業式に自ら出席することができた」など、ワークキャンプが参加者にとってよい方向に働いたという、うれしい意見や感想があった。

(2) 企画・運営上の課題と対策

不登校やひきこもりの状態にある青少年が抱える課題は幅広く、デリケートな部分も多い。運営にかかわるすべてのメンバーが、事前に参加者の状態をある程度、理解しておくための情報交換・打ち合わせ等に十分な時間をかけてキャンプに臨む必要がある。

また、参加者2名がキャンプ終了後に体調を崩した。もう少し温かい11月中に実施できるよう調整する必要もある。

今回のような遠距離からの参加は交通費にかなりの負担を強いられる。教育委員会や交流の家のマイクロバスを活用し負担を減らせるよう、協力体制の見直しや早い時期からの調整が必要である。

参加者募集については、宿泊型のキャンプでは、参加者の心のケアができる身近な指導者の存在が必要不可欠である。まずは適応指導教室単位で連携して、事業実績を積み上げることが大切だと考える。

上記の課題を解決しながら、愛媛の産業や大洲青少年交流の家のフィールドをさらに活用したプログラムを開発し、次年度もぜひ実施していきたい。

